月刊「우표」誌 2025 年 5 月号 p.42-45

日本の郵趣振興協会とのインタビュー

許　填（우표誌刊行委員長）

日本の郵趣振興協会（Society for Promoting Philately）は、2016 年 4 人の郵趣家が結成し、2017 年 4 月 14 日に特定非営利活動法人として認可され、各種の郵趣振興事業を推進してきている団体である。この団体は、国内外の郵便制度と切手類に関する調査研究、史料収集、普及啓発、成果発表および情報共有などの文化活動とそれに伴う関連諸活動を推進することにより、郵趣が社会の健全な発展に寄与するという目標意識の下、様々な活動を展開している。特に印象的なのは、この協会の組織的活動を通じて、日本の有力郵趣人たちが国際展示会で高得点を獲得する傾向が濃厚になり、突然世界的な注目を集めることになったことである。一般的な切手収集がますます衰退している時点で、これらエリートたちの真剣な活動がどのような結果をもたらすか関心が集まっている中で、郵趣振興協会とのインタビューを実現し、関連質疑応答内容を以下のように要約した。この回答は吉田敬理事長と横山裕三理事がまとめてくれた。吉田敬理事長はフィラコリアにも参加し、チャンピオンクラスに自身が伝統郵趣部門で大金賞を受賞しているプロイセンの作品を出品する予定である。

1. これまで私たちは日本郵趣協会だけを考えてきましたが、郵趣振興協会が最近、驚くべき速度で勢いを誇示することを目にしてきました。振興協会は特定非営利活動法人として登録されていることは存じていますが、その法的性格を簡単に教えてください。もし非営利法人ならば組織運営のための予算はどのように調達されているのか公開できる範囲内で説明していただければ幸いです。

ボランティア活動などの社会貢献活動を実施して営利を目的としない通常 NPO（Non Profit Organization）と呼ばれる団体のうち、1998 年 12 月に施行された「特定非営利活動促進法」の規定によって管轄庁（当法人の場合は東京都）から設立が認証された団体が特定非営利活動法人です。法人格を持つ‘認証 NPO 法人’ともいいます。ここでの‘非営利’とは、収益を団体の構成員に分配することなく主として事業活動に充当することを意味しますが、定められた商業活動を行なうなど収益を得る行為が一切制限されているものではありません。

当 NPO 法人の収入は、正会員及び一般会員からの会費、個人及び団体からの寄付金が大部分を占めており、その他はイベントに参加する切手商が支払う出店料が若干です。

2. 振興協会と郵趣協会は、日本郵趣連合の展示会を通さずに、独自の展示会審査を通じて国際展参加資格を獲得できるようになっていると理解していますが、どのように互いに揉めごとを起こさず円滑に調律できたのか気になります。

当 NPO 法人が主催している「スタンペックスジャパン」（Stampex Japan）は、FIP 登録審査委員による FIP の規則に準拠した審査を実施することによって、国際展参加資格を獲得できる切手展示会となっています。

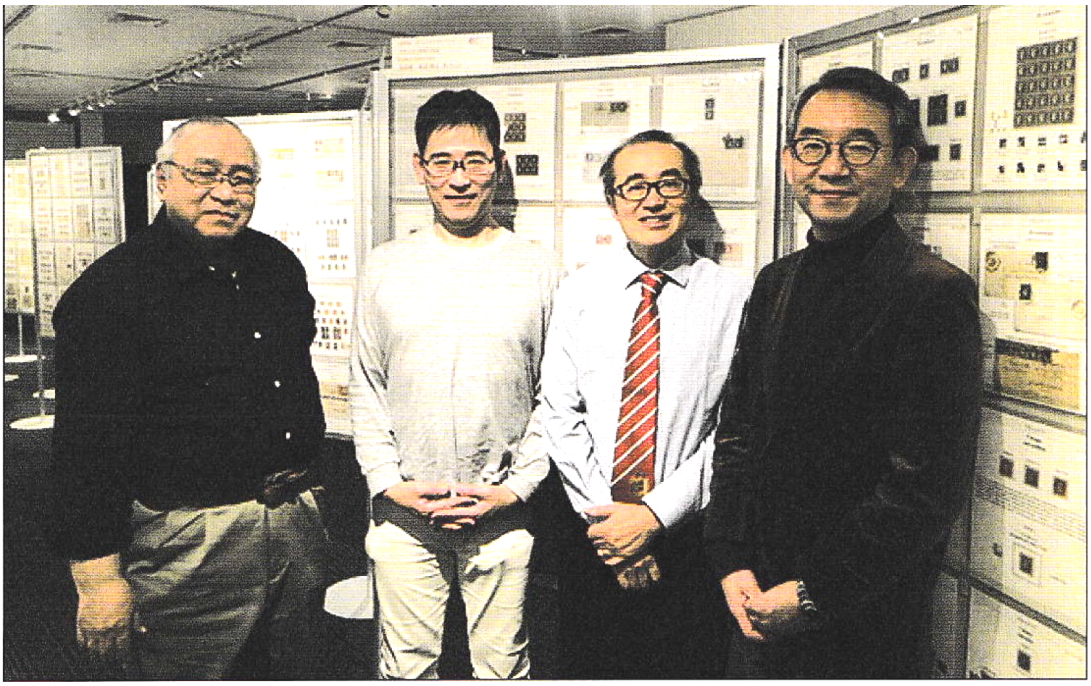
公益財団法人日本郵趣協会は日本の歴史的な郵趣団体でありますが、当 NPO 法人は会員数及び事業規模のいずれの側面からみても小規模な団体なので、事業としての競合など

は当初から存在しません。また郵趣の振興と発展という点では目的を共有しているはずなので特別な葛藤もありません。むしろ Stampex Japan 展示会の開催においては、日本郵趣協会からも後援を得ているだけではなく同協会所属の FIP 登録審査委員を派遣してもらうなど、良好な関係を維持しています。

3. 現在、両協会の活動を見ると、郵趣協会が切手趣味の一般普及に尽力している一方、振興協会は高次元的なコレクションの構築と国際展示会に参加して高得点を狙った特殊な戦略的目標を持っているように思えます。これは一種の労働分業のような・・・この私の認識は妥当なのでしょうか？

‘一種の労働分業’すなわち‘役割分担’に例えて話せば、当 NPO 法人は特にそのような目的意識を持って設立したわけではありません。ただ、組織規模にふさわしい事業を展開する上で、現時点ではこれまでに推進してきた事業が精一杯で限界ということです。ただし、‘「国際展示会参加での高得点を狙った特殊な戦略的目標を持っている’のは、おっしゃるとおりです。

Stampex Japan は展示可能な総フレーム数が 100 フレームに限定されているため、可能な出品作品は 20 点以下となるため、個々の出品者に対して国際展で高得点を得るための資料提示と展示技術面でのアドバイスと勧告を提供することに力を注いでいます。その一つが審査委員との対話（クリティーク）を重視しながら、その時間を十分に提供していることです。また、2023 年の展示会からは外国の審査委員を招聘しているため、日本人審査委員の研鑽のための場にもなっています。



左から FIP 審査委員佐藤浩一、郵趣振興協会代表理事吉田敬、
FIP 審査委員アンドリュー・チョン、日本郵趣協会理事長山田廉一

4. 現在振興協会は‘フィラテリスト Magazine’という日本語版ジャーナルと‘フィラテリックジャーナル’という英文版文献を発刊していて、スタンペディアオークションも

ありますが、これらの関係を知りたいと思います。

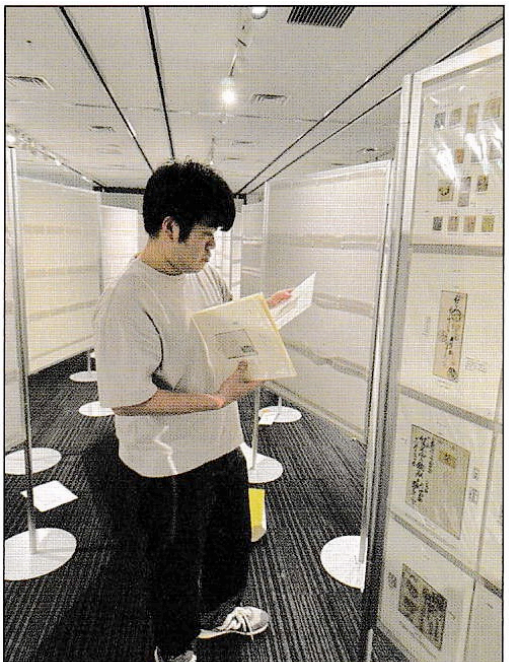
‘フィラテリスト Magazine’と‘フィラテリックジャーナル’は、当 NPO 法人の刊行物ではなく無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社が刊行しており、スタンペディアオークションもスタンペディアオークション株式会社が独自に運営しています。

5. 10-15 年前に私が観察したところによると、日本の著名なベテランコレクターたちが郵趣界を去った後、そのときは素晴らしく見えた日本の展示作品のレベルが、比較的停滞気味になったり、以前より退歩したように見えましたが、本当にここ数年で実に急速に発展している様子に眼を見張っています。まるで超一流コレクターを秘密のうちに育成して、一挙に世に送り込んだような印象を受けました。どうやってこんなことが可能だったのですか？

‘一挙に世に出た’というより、全国に存在していた郵趣基盤で育成された方々が現在で本格的に活躍していると表現するのが正しいでしょう。日本の郵趣界も郵趣人口の減少傾向を実感しており、それと同時に収集家の高齢化と後継者不足が大きな悩みとなっています。そんな中でもまだ全国各地に存在する郵趣団体の活動は着実に維持されており、伝統的な収集家の集いなど（日本郵趣協会の地方大会など）や小規模ながら切手展の開催などが活発に行われているのも事実です。そのため、若い頃に収集を諦めた方が、職業的に安定した時期を迎えて再び郵趣の世界に戻り、熱心な収集家となっている例もあります。

6. 私が 1970 年代半ばに日本に住んでいた時、すでに青少年たちが外国切手の伝統収集でかなりのレベルに達していたことに感心した記憶があります。韓国は切手趣味の領域において到底、おそらく永遠に追いつかない部分は、日本が外国切手の伝統収集において少なくともアジアでは最高水準に達しているという点です。韓国では自国の伝統郵趣とテーマチク以外はほとんど不毛の土地のようで、切手趣味の研究という側面からとても羨ましいのですが、日本はいつからこのようにバランスの取れたアプローチが図れたのか教えてください。

日本の郵趣界は、昔から伝統郵趣、郵便史、テーマチク、そして日本と外国という既存の収集分野がバランスのとれた状態で（とはいえ当然日本の分野が多いのですが）発展してきており、各分野で高い能力を持つ先輩たちがいたおかげで、後輩たちがこれをしっかり受け継いできたという側面があります。また、中央の郵趣誌だけでなく、各種の郵趣団体の会報、個人出版などで研究成果を発表する機会と媒体が依然として存在していることも大きな要因と考えられます。



韓国切手専門郵趣家、木戸裕介氏

7. 貴協会は、日本の郵政博物館とどのような提携関係を持っているか、外部に公開可能な内容だけでも教えていただければ幸いです。
近いうちに、韓国切手関連のアーカイブを公開して目録を制作したいのですが、私たちがベンチマークするべきことがあるかどうか教えてください。

郵政博物館は、当協会が開催する切手展示会の会場を提供して下さっていると同時に、博物館側が当協会に対して各種支援を求める場合、特別な代償なしに私たち協会は関連支援を提供する緊密な協力関係を維持しています。郵政博物館で開催される展示会は、年 1 回、3 月末に開催される‘スタンペックスジャパン’と‘郵政博物館特別コレクション展’があります。前者は 2020 年から始まり、後者は 2017 年から年 2 回程度ですが、ときには年 7 回も開催したことがあります。ただし前者は 100 フレームと決まっているのに対し、後者は 40 フレーム前後なので規模的に半分ほどに過ぎません。

8. 今後振興協会が特に重点を置いている分野や企画事業などがあれば教えてください。

二大イベント‘Stampex Japan’、‘Japan Philatelist Summit’の安定的な運営が最優先事項です。そして当協会では郵趣振興のため国内の競争展出品者を増やすことと、より高位の賞を獲得するための動機付けに力を入れていますが、将来日本人だけで国内切手展の作品数を十分に集めることは難しい時期が来るとも予想しています。将来的には、同じ課題を抱えている近隣各国のフィラテリストの皆さんと協力してマルチ・ナショナル的な展示会が開催できるシステムを構築します。特に今年の‘Stampex Japan 2025’からは IREX（個別規定）を英文で作成し、海外からの出品を受け入れる体制を作りました。旅行費用などの問題もあり最初の今回は残念ながら出品してくださった方はいませんでしたが、引き続き本施策を海外にアピールするとともに運用方式も改善していこうと考えています。

スタンペックスジャパン 2025 の準備を終えたばかりの、中央吉田代表理事、
その右横山理事、右端木戸氏

9. 今回のフィラコリア 2025 には日本の収集家が積極的に出品してくださった結果、それだけで 90 フレームを超える規模になりました。来る 9 月フィラコリアの参観に多くの方々が訪問してくれることを楽しみにしています。

どうぞ盛況のうちに終了することを願っています。